



おっとり生徒会長のドMな妄想日記

# マジカ

小説 筆祭競介  
挿絵 長谷川ユキノ

立ち読み版

序章                   もし、大好きな女の子の『オナニー』を見てしまったら

第一章                 妄想生徒会長の『射精』大会

第二章                 手錠をハメて『乱暴』にしてね♡

第三章                 男子トイレでザーメン専用『肉』便器

第四章                 捕らわれの『苗床』魔法少女

第五章                 咲ちゃん『たち』で、おしおきして♡

第六章                 究極の妄想は『ラブラブ』エッチ？

終章                   『マゾカノ』のために、僕はどこまでできるのか？

006

009

081

114

151

190

222

252

## 登場人物紹介

Characters



眺ちゃん……乱暴にしてね♡



ゆめかわ

### 夢川 みゆき

駒咲学園の生徒会長。抜群のナイスバディと包容力で学園中の男子の憧れの的。実はドMな妄想癖があり、ひよんなことからいろいろエッチな妄想をしてしまう。

の の はら あきら

### 野々原 眺

みゆきの幼馴染みで、生徒会の庶務を務めている。偶然みゆきの妄想癖を知り、それを治すために協力することに。

「つふぁ……ご、ごめんみゆきちゃん……その、いっぱい出しちゃって……」

暁はすぐにポケットティッシュを差し出したのだが、みゆきはポーツとした顔のまま口をつぐみ続けている。

そしてジツとこちらの顔を見詰めながら——ごつくん。

喉を大きく上下させた。

その光景に唾然とし、手にしたポケットティッシュをポトリと落としてしまう。

「ぼ、僕の……のんじやったの？」

「だって暁ちゃんが、『俺の汚ねえザーメンを、喉を鳴らしてゴックンしな』って命令してくれただじゃない」

「僕、そんなこと言っていないし！」

「ごめん、いっぱい出しちゃって、と謝ったのをどうすれば、そう聞き間違えることができるのだ。」

「えっ？ ……あっ」

するとみゆきはハッとして、

「……ごめん。妄想と現実がごっちゃになっちゃったみたい」

頬を恥ずかしそうにポツと染め、上目使いでこちらを見詰めながらモジモジし出す。

暁は改めて唾然とした。

その現実と妄想の区別のついてなきっぷりに、みゆきの症状の深刻さを強く実感する。確かにこれでは、実生活に影響が出てくることだろう。

「……えーっと。それはそうと……」

何はともあれヤルことはヤッてしまった。

己の股間を見下ろすと、そこにはズル剥けになったペニスが力を失い項垂れている。

（これが……僕のオチンチン……か）

己の生殖器を指で摘んでマジマジと見下ろす。

初めて見る肉傘の裏側に、ちよつとびっくり。

つるんとしたカリの質感や、くびれ部分の血管の浮き具合など、自分の身体の一部なの

にグロテスクに感じてしまう。

「あつ。ごめん。お口で最後までお掃除しないとね」

「ちよつ、みゆきちゃん。な、何を……つふあああ」

幼馴染みがいきなりこちらの股間にその美貌を寄せてきて、止める間もなく自分自身がグロテスクだと感じたペニスを、再び口に啜えてしまう。

しかもみゆきの舌は躊躇なく肉先の小穴に伸び、精液の残りを舐め取っていく。

「んふあああ!? そ、そんな……ダメだよ。そんなことされたら、またあ」

何しろこちらはイッたばかりで超敏感。

彼女の熱心な舌使いに、ビリビリと鋭い電流のような快感が迸り、股間の分身がすぐにその硬度を回復させる。

その即物的すぎる己の反応に、少年の頬が赤みを増す。

「眺ちゃん、忘れたの？ 今してるのは『射精大会』なんだよ」

「……ふえ？ ……え？ ええええええええ!!」

大会、というぐらいだから一回では終わらずに何度もする、ということか。

唾然としている眺をよそに、みゆきは己の唾液で濡れ光る勃起ペニスを愛おしそうに手コキしはじめた。

又チュ又チュとしなやかな掌に擦られて、イッたばかりにもかかわらず、自慰以上の愉悦を発生させている。

(そ、それにこの眺めは……)

上から見下ろす格好だと、二の腕が胸の膨らみに脇から当たり、豊かな盛り上がり制服の中でタップと揺れているのはつきりわかる。

自然と視線は、その小刻みな揺れに引き寄せられていった。

「私のおっぱい。そんなに気になる？」

幼馴染みが再びハアハアと息を乱しながら、熱っぽい視線でこちらを見上げてきた。眺は己のだらしのない表情をすぐに自覚し「ご、ごめん」と視線を慌てて逸らす。が。

「全校集会とかで私が生徒会長のお仕事してる時、皆、私のどこ見てると思う？ 今のね、眺ちゃんみみたいにね……男の子たちはみんな……わ、私のおっぱい見詰めてくるんだよ……凄くエッチな目でえ」

「……ふえええ？」

さすがにみんなは言いすぎだと思うが、男子たちがみゆきの胸を見て、多少なりともいかがわしい想像をしてしまうのはしかたないと思う。

何しろこの桁外れたサイズなのだ。

今は上から見下ろす格好になっているのでよくわかるが、これでは普通に歩いていても足元が見えないに違いない。

「みんな想像してるんだよお。私の制服を剥ぎ取って、このおっぱいを直に見たいって。こんな風に」

焦点が定まっていけないポーつとした視線で憑かれたようにそう言いながら、まずはブレザーの大きなボタンを外し、次にシャツのボタンも一つずつ外しはじめる。

すると深い胸の谷間がチラッと覗き、ブラジャーまでもが顔を出す。

しかもその色は何と黒。

清純なみゆきのイメージから、下着の色は白だとばかり思っていたので意表を突かれた。すでにフェラまでしてもらっておきながら、それだけでドキッとしてしまう。

「ああ。見られてるう。私が自分で……おっぱいポロリしちゃうところをお……」  
みゆきは「んはあ♡」と熱っぽい息を吐くと、服を着たままホックを外し、器用にブラだけスリりと抜いた。

(わっ!?! わわわわわっ!?)

結果、制服の上着を羽織るような形のまま、豊かなバストが剥き出しになる。  
彼女の名前のごとく、まるで雪のように白く美しい肌のきめ細かさ。

その頂に小さく載っている、鮮やかな雉色とさいろの突起。

人並み外れたサイズにもかかわらず下乳に弛たるみや乱れは微塵も見えず、素晴らしい肌と肉の張りで美しい釣鐘型を維持している。

「す、凄い……」

睨だつてヌードグラビアを見た経験は人並みにある。が。

(こ、こんなに綺麗で、大きなおっぱい……初めて見た……)

その美しくてポリウム満点すぎる白い膨らみに、少年の視線は釘付けた。

「私、知ってるよ。男の人って大きなおっぱいを見ると、皆そのおっぱいにおちんちんを挟みたくなっちゃうんでしょ。女の子のおっぱいは、赤ちゃんにミルクをあげるために大きくなるのに、それをエッチな道具にしちゃうんでしょお」

幼馴染みは熱っぽい視線でこちらを見詰めながら、

「ねえ眺ちゃんはどうなの？ 私のおっぱいに挟みたい？」

その場にゆつくりと横になった。

「あ、あの……ぼ、僕は……その……」

対して眺の口からは、彼女の見事すぎるバストに圧倒されて、意味のある言葉は出てこない。

「挟みたいなら、ここに置いて。眺ちゃんのおちんちん」

みゆきはそれだけ言うと、右手で己の乳房を脇からゆつくりと持ち上げてから、こちらに見せつけるように手を離れた。

ふるふるン、とありもしない効果音が聞こえてきそうなダイナミックさで、みゆきの巨乳が大きく弾む。

「うわああああ……」

先ほどイッたばかりで、未だフェラチオ時に塗り込められた唾液で濡れる男根がそれだけで——びきびきびきッ！

青筋立つほど漲った。

そして、その柔らかな白肉の卑猥な揺れが、固まっていた眺の足までも動かさせる。

一步、バランスを崩したように前に出ると、後は本能の赴くままみゆきの薄い腹を跨いで馬乗り状態になっていた。

「み、みゆきちやああん……」

すでに完全勃起している男根を、その豊かな乳の間に置く。直後、こちらを見上げる幼馴染みの顔は興奮で赤らみ、

「は、挟むね」

その声は明らかに興奮で上擦っていた。

朧がコクンと頷いた直後、みゆきが脇から両手ですくった乳房で——ずにゆん！と一気に挟まれる。

「ッくうううう！」

ペニス全面に満遍なくかかる柔らかな圧力に、絞り出すような愉悦の声が漏れた。そして、てつきり熱いと思っていたみゆきの胸は、むしろひんやりと冷たかった。

「よかったあ。私のおっぱい、朧ちゃん以外にパイズリさせられちゃうんじゃないかって、ずっと心配してたんだあ」

「ふえっ？ そ、それってどういうこと？」

「えっとな。例えばね——」

するとみゆきは今までしていたのであろう、妄想を語りはじめた。

「私のことをエッチな目で見てた男の子たちがね。朧ちゃんを人質にとつて、人気のないところに私を呼び出すの。そして朧ちゃんを傷つけられたくなかったら言うこと聞け、っ

て命令してきて……。私は嫌だけど……眺ちゃんが人質に取られちゃってるから、しかたなく命令に従うの。男の子たちは沢山いて、まずは私におちんちんをしゃぶらせるの。さっきの眺ちゃんみたいに」

ヌチュヌチュとフェラ時の唾液を潤滑油にして中の男根を胸で扱きながら、みゆきは何かに憑かれたように卑猥な妄想を語り続ける。

その口ぶりがあまりによどみがないために、

「そ、そんな……」

いつの間にか、彼女の妄想を本当にあつたことのように錯覚しはじめていた。

「一人一人しゃぶらされて、舐め方とかいろいろ命令されて……こんな風に——」

みゆきは横になったまま「んあつ」と大胆に舌を出すと、何もない空間をまるでナニがあるように舐め出した。

ペニスを丸ごと胸で挟んだまま、清楚な美貌を赤らめて大胆にフェラの一人演技をするその姿は、卑猥この上ないものだった。

その桃色の肉片の熱くしなやかな感触を知っているだけに、少年の興奮もアツと言う間にマックス状態まで跳ね上がる。

「そ、そんな……それじゃあ、皆、みゆきちゃんのお口でイッちゃったの？」

ハアハアと息を荒くしながら、彼女の妄想を本当にあつたことのように尋ねている。

「うん。みんな凄くイキたそうにしていたけど、口には出さないの」

「えっ!? じ、じゃあ、どこで……」

「……おっぱいだよ」

「ふえっ!?」

「皆、私の大きくてエッチなおっぱいが目当てなの。もう我慢できなくなった一人に押し倒されて、筆り取るみたいに制服を脱がされておっぱいを剥き出しにされて——」

黒髪の生徒会長が語る内容がまざまざと脳裏に思い浮かぶ。

目を血走らせた男たちが、狩った獲物の皮を剥ぐようにみゆきの服を引き裂いていく。

上着を脱がすのももどかしく、ブラだけを引きちぎるように脱がされるのだ。

そう。まさに今のみゆきの姿そのものだ。

そして今自分の男根を丸ごと包み込んでくれているこの綺麗なバストが、どす黒い欲情の視線で汚される。

「一人目が私のお腹の上に乗って来て、おっぱいの間におちんちんを置くの。興奮で声をちよっと裏返しながら、挟め、ってただ一言命令してくるの。私がイヤイヤって首を振ると、人質になってる眺ちゃんの方を顎でしゃくって、アイツがどうなってもいいのか、って脅してくるの」

「……ッッ!?」



「ッあ……くっ……っあぁあ……」

アイマスクをしてもわかる恍惚としたみゆきの表情が、暁の欲情を業火に変えた。  
 (も、ももももう我慢できないよ！)

しゃがんだ状態から立ち上がり、ズボンのファスナーを下して、凄まじいスピードでペニスを取り出す。

授業中からずつと勃起していたが、今の漲りはマックス状態。  
 焦り気味に片手を伸ばし、ミニローターをぬるんと引き出す。

「ハ、ハメちゃうからな。ゆ、夢川のバージン、先生が奪っちゃうからな！」

「嫌っ。ダメっ。絶対にだめ」

アイマスクをしたみゆきがブンブンと首を左右に振ってくる。

明確な拒否を訴える相手のリアクションに——暁は首筋の裏辺りがゾクゾクと粟立って  
 いた。

それは罪悪感のようなマイナス感情ではなく、むしろ喜びに近いプラスの感情。

こんな感覚、初めてだ。

あまりにみゆきがDMなため、自分のSが完全に目覚めてしまったのだろうか。

嫌がる相手を無理矢理犯す禁断のシチュに、ドス黒い獣の炎で全身の血が沸騰している。

「今日から夢川のこと、先生専用のザーメントイレにしてやるぞおおお！」

荒々しくみゆきの片足を持ち上げると、大きく開かせた股の間に猛り狂うペニスを差し向けた。

真っ赤に充血した亀頭を、ねっとり濡れた牝敵に密着させ、

——ぐぷっ、ずるるるるン！

一気に奥まで貫いた。

「っあああ……」

その熱い潤みに、睨はくぐもった声を漏らし、

「んはあああああああああ！」

みゆきは大きく顎を仰け反らせて絶叫する。

そのあまりの大きさに心臓がヒヤッとした。

別館とは言え、ここは学校。

放課後でも、いつ生徒や教師がやってくるかわからない。

こんなことをしているところを誰かに見られたら停学モノだ。

「こ、声を出すなッ。他の奴らにバレてもいいのかッ」

咄嗟に出たこのセリフは、みゆきとの妄想プレイでは過去にないほど真に迫っていた。

自分本人にとっても、変態教師にとっても、人に見つかってはマズいというのは同じなためだろう。

それだけにドMなみゆきにもよく効いたようだ。

根元までペニスを打ち込まれた女体が、ビクンと官能的に大きく震える。

そして、横隔膜が震えるために自然と漏れてしまうような震え声で「あ、ああ……」と呻いてから、だらしなく開いていた唇をキュツとつぐむ。

「よし。わかったみたいだな。それじゃあ動くぞ」

朧は改めて『陵辱』を開始した。

——グちゃん、ぬるちゅ、ズちゅ、じゅく、又ぐちゅん。

「んあんっ、つくうう、くっ、んああああッ」

狭いトイレの個室に、くぐもった女の喘ぎ声と、粘っこい音が響き渡る。

それはまさにみゆきが妄想した状況だ。

愛液たっぷりの膣襞を、剥き身の亀頭が奥へと掻き分け埋まっっていく快感に、朧も声が漏れそうになってしまう。

（前からだとオチンチンの入っっていく角度が全然違う！）

初体験のバックに比べ、肉棒の裏側が彼女の中により強くゴリゴリと押しつけられている感じなのだ。

すると片足だけではとても立っていられないみゆきが、狭いトイレの壁にもたれかかりながらこちらにしがみついてきた。

背中を掴むその悩ましげな力の籠り方に、睨は再びゾクゾクと黒い感情を刺激される。今、みゆきを抱いているのは自分だけ自分じゃない。

目の前でアイマスクをつけた幼馴染みは小さく「いやあ、いやああ」と口になっている。つまり自分をゾクゾクさせている正体は、感じれば『陵辱者』に対してもこんな抱きつき方をするのかという複雑な嫉妬心だった。

結果、少年の突入は荒く加速し、相手を色んな意味で責め立てる力強いものになった。

「んーっ、ツツんくくんっ！」

たまらないのはみゆきである。

再び下唇を強く噛みながら、口の中で絶叫し続けていた。すると――。

「おい。今、やっぱ、何かヘンな呻き声が聞こえなかったか？」

「気のせいだって」

男子生徒たちが、トイレに入ってきた。

獣欲に意識も肉体も沸騰していた睨は、素でビクッと背筋が凍る。

全身の動きを急ストップさせ、ヤバイ、ヤバイ、と頭の中で連呼する。

しかしドMな人間にとっては、ヤバイ状況だからこそより感じてしまうのだろう。

向かいあって身体を繋げているみゆきは、激しく突き上げていた時以上に全身をビクビク震わせている。

「っあ……くっ……っう……」

下唇を強く噛み、しつかりと閉じていた口が、今にも綻びようとしていた。

(ま、ままままズいよこれは！)

こんな時に大きな喘ぎ声を出されたら、自分だけではなくみゆきの学生人生さえ終わってしまふ。

咄は反射的に、DMすぎる幼馴染みの唇を自分の唇で塞いでいた。

「ツツツツつっつ!!」

直後、みゆきが今までにないほど背中をぎゅうつと握り締めてくる。

そして咄はハツとした。

(き、きききキスしちゃった!!)

セックスまでしておいて何なのだが、実はこれが二人のファーストキス。

それをこんなところで、こんな理由でしてしまうとは！

(で、でも……)

唇で感じるプニツと柔らかな感触の気持ちよさは想像以上。

セックスとは違った官能の甘さに、より深く唇を重ねるため首を斜めに倒してしまふ。

対してみゆきも今の設定を忘れていいのか、こちらに合わせて逆向きに顔を倒し、同じ

ように唇を深く密着させてくる。

と、個室トイレの中で二人の男女が濃密なファーストキスに没頭してる間――。

「つたく。やってらんねえよなあ」

「科学実験の補習とか、意味ねえつつーの」

男子たちはツレションをはじめた。

しかも、どうやら自分たちがここに来る切っかけの怪談話をしていた二人のようだ。

「でもさ。ここ来る時、生徒会長さんとすれ違ったのはラッキーだったかも」

「あつ。俺もそれ思った」

「可愛いよなあ。おっぱい超デケえし」

「あの、清純な感じがたまらんのだよなあ」

「透明感があるよね。ヤバいくらい」

「世の中にエロいことが存在するなんて、全然知らないんだろうなあ」

「純粋無垢なみゆきお姉タンに、女の喜びを教えてやりてえ」

「お前のそれじゃ、無理だろ」

「んだとお。ちよつとデカイからつて調子に乗ってんじやねえ」

と、ツレションながらの会話をしながら男子たちは用を足し終わったようで、すぐに小便器の水を流す音が聞こえてきた。

「夢川先輩みたいな人と付きあえる奴ってどんな男なのかなあ」

「そりゃあ、先輩と釣りあうぐらいイケメンで、頭もよくって、ケンカも強くって——」  
そんなことを言いながら、さっさと立ち去っていつてしまう。

結果、残されたのは——。

「ふふあ」

その間、ずっとファーストキスをしていた二人である。

「せ、先生にだけじゃなくって……た、沢山の、後輩の……お、おとこのこたちに……お、  
犯され……り、輪姦……つふあああ」

みゆきは彼らの会話を切っかけに、今度は複数プレイを妄想しているようだ。

そして暁の役目は、彼女の妄想を実現すること。

(で、でも僕一人じゃどうしようも……)

そこまで考えた時にハッとす。

彼女はアイマスクをしていて、全身の性感帯には未だ各アイテムが装着されたままだ。

みゆきの桁外れに妄想に入り込んでしまう特性を計算に入れれば——充分にいける。

「……いいことを教えてやる。実は今、俺たちは二人だけじゃないんだ」

「ふえっ？」

こちらからこんなことを言うてくるなど完全に想定外だったのだ。

みゆきが素で驚きの声を漏らす。

「実はお前のことを狙ってた男子たちが、俺たち二人のセックスをずっと見てたんだ」  
話の流れはムチャクチャである。

それでも彼女は、すぐにこちらの意図を察したようだ。

「いや——みゆきのことだから単に今のセリフに触発されて、新たな妄想の世界に墮ちて  
いる可能性の方が高いか……。」

「あつ……ああつ……いやあ……そんなのダメえ……。」

その証拠に、こんなセリフを口にしながらその唇は恍惚と震えている。

頭の中の妄想が膨らみすぎて、逆に陵辱される役通りのリアクションが取れなくなつて  
いるようだ。

しかしいずれにしろ、みゆきが求めているモノに変わりはない。

眺は右手を自分の制服のポケットに突っ込んだ。

指先にカチンと当たるプラスチックの感触。

そう。そこには各ローターの無線リモコンが入っていた。そして——。

「全員、もう我慢できないってさ。お前のエロい身体にな！」

その全て同時にオンにした。

「ンあああああああああああ！」

直後、みゆきの全身がビクンと大きく仰け反り、壮絶な絶叫を迸らせる。

暁はそれを塞ぐため、かぶりつくようにして彼女の口を自分の口で塞いだ。

「んんーっ！　っっんん！　ふぐんんんん！」

それでもみゆきの絶叫は抑えきれず、こちらの口内に吐き出される声がトイレ中に反響している。

これだけ大きいと、トイレの外にいても声が聞こえかねない。

（こ、ここここうなったら！）

みゆきの声を塞ぐため、唇だけではなく舌もヌルンと重ねあわせた。

「んん——っ!!」

舌先から逆る脳天に突き抜けるような鮮烈な快感に、今度は暁が彼女の口内で絶叫してしまふ。

唾液にぬめる味覚器官を舐めあうことで、これほどの快感が発生するとは。

何とかギリギリで保っていた理性が、初ディープキスのインパクトで彼方に吹き飛んでしまふ。

（みゆきちゃん！　みゆきちゃん！　みゆきちゃああああああん！）

左手で彼女の片足を抱えたまま、再び激しい突入を開始した。

そして右手は本能の赴くままブラをズリ下し、直にバストを鷲掴みにする。

その際、乳首にセットしていたミニローターが外れたが、肉悦に沸騰した頭から、陵辱



役という意識は消し飛んでいた。

それでも、やることは変わらない。

彼女の胸を揉む手つきは荒々しく、突き上げる腰の勢いはまるで獣のようであった。対してみゆきの反応も凄まじい。

こちらのことを『眺』だと思っているのか、まだ『中年教師』だと思っているのかわからないが、夢中で舌を絡めてくる。

背中に回していた手も、今ではこちらの頭を掻き抱いていた。

そしてあまりに熱烈な眺の突き上げに耐えきれなくなったのか、たまらずみゆきがディープキスを解き顎を大きく仰け反らせる。

「ら、らめえっ！ そんなにはげしくう、前だけじゃなくって、お尻までブルブルされてええええええ！ あああああ——んぐううう!!」

しかし眺は仰け反るみゆきに対して爪先立ち、強引にその唇を上から塞いだ。

それは彼女の絶叫が外に聞こえないようにするためか、もともと彼女と彼女の唇と舌を貪りたかったかのか——。

それが自分では区別できないほど、本能的に激しくむしゃぶりついていた。

相手もこちらの興奮が強く伝わったのか、すぐに舌を絡みつかせてくる。二人は共にギュッと両目を瞑り、夢中で舌を絡めあつた。

（嫌だ！ 嫌だ！ そんなの嫌だああああ！）

しかし興奮しきった眺めの頭の中では、目隠しされた生徒会長に中年教師と年下の男子が群がって、ムチャクチャに貪っている光景が浮かんでしまっている。

剥き出しになった彼女の胸を皆が好き勝手に揉みしだき、アナルまでもペニスの先で執拗に擦り、そしてざっくりと割れたパイパンマ○コを深く貫いている光景が。

みゆきはいくら理性で嫌悪を示しても、DMな身体は陵辱に堕ち、見事な肢体を貪婪にくねらせてしまう。

それを見た男たちは、さらに欲情で目を血走らせてみゆきを責める。

今の自分のように――。

（うわああああああああああ！）

今、自分が感じている快感を他の男たちが貪っていると想像したら、胸が張り裂けそうになる。

愛情。肉欲。嫉妬。官能――極彩色の感情が少年の精神に何度も上塗りされ、肉体で感じている快感を何倍にも増殖させる。

もう限界だ。

色んな意味で、イッてしまう。

「つぶふあ。い、いっちゃうぞ。もうイキそうだぞ」

相手のセリフに、少年は自分が手にした赤い首輪を見下ろした。

「ん♡」

するとみゆきが再びキスを待つような姿勢と顔になる。

（え、え〜と……つまりこれは……）

自分の手で、首輪を嵌めて欲しいということか。

やっと彼女の求めていることを理解した。

それぐらい授業中にローターをブルブルさせることや、学校のトイレでエッチすること  
に比べたら何てことない。

咲は首輪の金具を外し、顎が上がって剥き出しになっている白い喉に、軽い気持ちでそ  
の赤いベルトを巻き出した。

しかし——ドッキン、ドッキン。

妙に胸が高鳴ってくる。

そして改めて、自分が今していることのアブノーマルさに思い至った。

本来、首輪はペットや家畜などの動物に嵌めるもの。その主である人間が所有を主張し  
たり、飼いやすいようにするために。

これではまるで自分がみゆきの飼い主になるようではないか……。  
今までいろいろとヤバイシチュを経験してきたが、何だかこれはヤバイの意味が少し違

う気がする。

そんなことを考えて胸をドキドキさせながら、白い首に赤いベルトを嵌め終えると、

「あは♡」

みゆきが一際甘い吐息を漏らした。

「これで、私は朧ちゃんのペットだね♡」

こちらを見詰める琥珀色の瞳が、すでに熱っぽく潤んでいた。

DMな彼女のこと。

本来、対等であるべき人間に、ペットの象徴である首輪を嵌められることは、それだけで心身共に支配された気分になれるのだろう。

自分が先ほどドキドキした以上に、深く感じているようだ。

「……あと、これも今渡しておくね」

みゆきがこちらに手渡してきたのは、先ほど買ったバイブの箱。

つまりこれで『沢山の朧ちゃん』を演出して欲しいということか。

「ねえ、ご主人さま。早くペットのみゆきにおしおきしてえ」

しかもいきなりこちらを『ご主人さま』扱いである。

「え、えっと、そ、それじゃあ、みゆきちゃん、その……」

いきなりそんなこと言われても、ご主人さま慣れしていないのでシドロモドロになって

しまう。と。

「ご主人さま。私のことは『牝犬』って呼んでね♡ 蔑さげすむ感じで♡」

「……う、うん。わかったよ……め、牝犬」

何にしても、眺としてはペットの言うことに従うしかない。

「はい♡ ご主人さま♡」

対してみゆきは牝犬と呼ばれてとても嬉しそうだ。

そして忠実な牝犬らしく、大きな瞳をうっとり潤ませて『おしおき』を待っている。

(ど、どうしよう……)

今までのように『陵辱者』役なら慣れもあってその手の言葉が出てくるのだが、自分本人のままで『ご主人さま』となると勝手が違う。

しかも『おしおき』するとなると、何をしたいか全くわからない。

「……や、やっぱりちゃんとおしおきされる理由がないと困っちゃうよね」

何もリアクションを起こさない眺に対し、みゆきが助け舟を出してくれた。

「あつ、その……うん」

「それじゃあペットの牝犬がご主人さまのことが好きすぎて、洗濯機の中からご主人さまのパンツを勝手に盗み出しちゃったことをおしおきして。牝犬がそれを夢中でクンカクンカしてたところを見つけた直後、っていう流れで」

いったいどんな頭の構造をしていたら、こんな発想がいきなり浮かぶのだろうか。

「あと、とりあえず私、牝犬らしく服は脱いじゃうね」

何が牝犬らしくなのかは不明だが、啞然としている朧の前で、みゆきはサクサクと私服を脱ぎ出した。

「ふわ〜」

そうして目の前に現れたみゆきの下着姿に、朧の口から感嘆の溜め息が漏れる。

思えば、ブラとショーツだけの彼女の姿を見るのはこれが初めてだ。

（す、すっごいスタイル……）

学園の制服姿だろうと、魔法少女の衣装だろうと、彼女はどんな服を着ていてもよく似合うが、その理由がよくわかる。

小さな顔に豊かなバスト。古代彫刻のように鋭くくびれた腰に、長く均整の取れた両脚。まるで女の理想——いや、むしろ男の理想を具現化したような身体付きをしているのだ。

（エ、エツロいよお〜）

ここまでそのプロポーションを見せつけておきながら、女の子が人に見せてはいけな部分だけ、黒の極小下着で隠しているのだからたまらない。

そして嫌でも目を引くのが、首に巻かれた赤い首輪だ。

コントラストの効いた雪のように白い肌と黒い下着の組み合わせを、そのワンポイント

が一際、卑猥に引き立てている。

「——ん？」

首輪の赤さに引き寄せられて気づかなかったが、彼女のブラ部分をよく見てみると、頂点付近が不自然に盛り上がっていた。

「……そ、それ」

眺が彼女の胸を指さすと、みゆきがポツと頬に濃い朱を走らせる。

「……眺ちゃんたちに、いつでも鬨り者にされるように事前にセットしておいたの♡」  
と言つて、恥ずかしそうに身をくねらせる。

「ね、ねえ、早くこんなエッチなワンワンをおしおきしてえ」

自分にローターセット済みの下着姿を見られたことにより、DMな女体がムズつき出したらしい。

「う、うん。ちょっと待ってて」

眺は慌ててパイプの箱を開いた。中からパイプ本体と遠隔操作ができるリモコンを取り出し、それぞれ付属の電池をセットする。

試しにスイッチをオンにしてみると——。

「うわっ!!」

亀頭部分がウインウインと回り、しかも全身が振動するタイプだった。

（こ、こんななんだ……）

とりあえずスイッチをオフにして視線をみゆきに向けると、大好きなご主人さまを前にして待てを命じられた牝犬のように、今にもこちらに抱きついてきそうな表情をしていた。「え、え〜と。……それじゃあ、まずは四つん這いになって」

何にしるこのパイプを使わないことには始まらない。

本来なら仰向けにして脚を開かせるところなのかもしれないが、牝犬設定で首輪をしているため四つん這いになるよう指示していた。

「はい♡ ご主人さまぁ♡」

そして現れた目の前の光景に、少年は再び「うわぁ」と感嘆の声を漏らしてしまう。

赤い首輪を嵌めたみゆきが四つん這いになると、一層彼女が人ではなく、ペットに見えてしまうためだ。

そのアブノーマルさだけでもドキドキなのに、加えて今日もTバック状の黒ショーツを穿いている。四つん這いになることにより、形のいいヒップが強調され、柔らかそうな丸みがプリプリと弾む。

（たまらないよ、ホントにこれ！）

朧は一刻も早くみゆきを『おしおき』するため、素早く彼女の後ろに回りその黒パンティを横にズラした。

案の定、みゆきのアソコはまだ何もしていないのに、すでにたっぷりと濡れている。

「そ、それじゃあ……僕のパンツをクンカクンカしてたおしおきするよ」

相変わらずびっぴちりと閉じたままの縦筋一本に、パイプをあてがう。

「はうん♡」

ぐぶん——と亀頭の形に盛り上がった先端を彼女の中に埋めると、左右に割られた大陰唇が敏感に震え、内側に向かって僅かに収縮した。

そのすぐ上で息づく小さなアナルは、もっとはつきりキュウウウと窄まっている。

「はっ……っふぁ……ご、ご主人さまのおしおきチンポ、ガッチガチにかたあぁぁい」

そしてみゆきの精神は、案の定、妄想の世界にどっぷりと入っていた。

ゆっくりと埋めていくプラスチック製のパイプを、暁のものだと脳内変換している。

(は、早く僕も……気持ちよくなりたいたいよお)

大好きな女の子のこんな姿を見せられては、若い股間がズボンの中で我慢できないほどムズムズしてしまうのも仕方がない。

暁はパイプを一番奥まで埋めきると、横にズラしていた黒い下着をその上に被せた。

(よ、よし。これでいいや)

両乳首のローターにパイプが加わり、複数の自分を演出する下準備は完成した。

暁は凄まじいスピードで立ち上がると、アソコが埋まっているために、ズボンのファス

ナーを下ろすと大急ぎでみゆきの前に回った。

「ああん♡ 前のご主人さま、みゆきのことこんなビキビキになって怒ってるう♡」

首輪を嵌めた幼馴染みは、さらに夢見心地な表情になったがすぐに啞えてこない。

まるでお預け中の犬のように、上目使いでこちらを見上げて命令を待っている。

「も、もう二度と、僕のパンツを取っちゃだめだぞ」

「はい。ごめんさない、ご主人さまあ。……で、でもみゆきい、ご主人さまのことが大好きすぎてえ、どうしてもご主人さまのエッチな匂いをクンクンしたくなっちゃうんですう」

「ツツ!? ……そ、そういう時はパンツを取るんじゃなくて、僕に直接おねだりするんだ。ほら。今はどうしたいんだ」

朧は勃起ペニスの根元を自ら掴み、みゆきの鼻先でブンブンと左右に振ってみせた。

ようは『陵辱役』でなくとも、彼女を辱めればいいのだ。

ならばこれまでを経験値で、この手のやり取りにはスムーズに対応できる。

「ああん♡ み、みゆきに、ご主人さまのおちんぼしゃぶらせてくださいい♡」

「全くスケベな牝犬だな。クンクンじゃなくて、いきなりしゃぶりたいのか」

「そ、そうなんです。ああ、ご主人さまの見てると涎が止まんないですう」

「しかたないな。それじゃあ、いいぞ——くうっ!？」

OKを出したその直後、ビキビキに剛直していた男根を襲った肉悦に顎が仰け反る。

熱くてトロミの強い唾液が、ペニス全面にねっとり絡みつき、

——レロおおおん、レロレロ、むちゅ、れろおおおん。

しなやかに躍る舌が、裏筋を中心に幾度もそれを塗り込んでくる。

「んじゅルルルつはあ……ごしゅりんさまのおエッチな味い♡ レロんちゅう♡」

「あああつ。す、凄く……あああつ、熱いのがああ——くっふあ!!」

朧の口から大きな愉悦の声が漏れてしまったのは、舌だけではなく、みゆきが頭ごと口を動かしてきたからだ。

キユツと絞られた唇に、ぬるーつ、ぬるーつ、と根元からカリ首まで扱かれて「あああつ、ああー」と甲高い愉悦の声が止まらない。

朧はそれでも何とか仰け反らせていた顎を引き、己の股間に視線を向ける。と。

「んんっ♡ ンちゅん♡ ンんんっちゅううう♡」

赤い首輪を揺らめかせながら、みゆきがとろけるような瞳で自分を見上げていた。

しかも両頬はベッコリとへこみ、肉棒への吸いつきの強さを物語るように頬骨まで浮かせている。

（こ、このままだとお口だけですぐにイッチャうよお……）

一方的に終わっていけないと思い、朧は手にしたローターのスイッチをオンにした。

「ん——っ!!」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。美満の方購入して下さい。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!